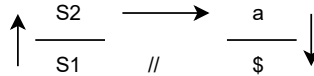


図 8：神経症の主体における四つのディスクール（3）

#8.6

確立した父性隠喩について、
現実的父に同一化し
象徴的ファルスを持っていると
思いたい者は

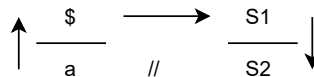


右の「大学のディスクール」を好むようになる。

- ・主体（=\$）は言説の根拠（=S1）を所持する者に同一化している
- ・言説の根拠はそれ単独ではシニフィアンの体系を形成できず、自身に基づいた様々な命題を持っている（=S2/S1）
- ・様々な命題は、新たな残余aを既存の問いの枠組みを保持したまま解決しようとする（=S2→a）
- ・だが、その試みは不徹底に終わり、新たな欲望の主体（=\$）を発生させる
- ・しかし、新たな欲望の主体に従って再びシニフィアンの体系を組みかえることは、現在の主体の同一化を放棄させることを意味するので、この新たな欲望の主体は抑圧される。

#8.7

確立した父性隠喩について、
象徴的ファルスに同一化し
現実的父に欲望されることを
欲望する者は



右の「ヒステリー者のディスクール」を好むようになる。

- ・主体は、対象aの位置に来るべき象徴的ファルスに同一化するために、ファルスに仮装する（= \$/a）
- ・仮装した主体は自身では対象aを解消できない
- ・仮装した主体は対象aを解消すべく、現実的父になりえそうな他者に働きかけて（= \$→S1）様々な命題を吐き出させる（= \$→S1/S2）
- ・しかし、いかなる命題も対象aそのものを根絶することはない（= a//S2）
- ・そのため、それらの命題の根拠（=S1）も失墜する

from #8.5